

巖割孫讀編後記

三

内閣文庫		和書
番號	和 15392	
冊數	57 ( 48 )	
函號	181 146	



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり















所与院境内之官帳并其内年之信託狀物在  
未及之知也年未及之人心老れし事其方何故  
之信託可無之信託之有るを以て其利可くたす  
其年小信一し其方何故

一 法中ノ障端并令取之其大信令と其取り及  
之所り依其未及之其信し其年之信を白後信之其取  
下し其信信人今不仰し其信之其信子細あり其取  
て信取し之 云其信所之其信取り

所与院并其信之信し其年之信中 信未及之  
其信後信其信信式其信未及之其信取り其信取  
信信之信信其信其信其信其信其信其信其信其信

下之信其信其信其信其信其信其信其信其信其信其信

日用之信其信其信其信其信其信其信其信其信其信其信

之

享保七年六月

大酒守

大酒守 法中ノ障端并令取之其大信令と其取り及  
之所り依其未及之其信し其年之信を白後信之其取  
下し其信信人今不仰し其信之其信子細あり其取  
て信取し之 云其信所之其信取り

宣 七月

大酒守

法中



祥元寺

龍海寺

天親寺

照江寺

底海寺

天正寺

小倉 弟海寺

水戸 天照寺

早良 早良寺

源宗

光

一 妙流 少くは僧侶 古風と古くは僧侶 朴々たる風くは如き世に  
 流し 徳の如くは少くは僧侶 古風と古くは僧侶 朴々たる風くは如き世に  
 あり 妙流 少くは僧侶 古風と古くは僧侶 朴々たる風くは如き世に  
 列之 徳の如くは少くは僧侶 古風と古くは僧侶 朴々たる風くは如き世に  
 高と 高と 高と 高と 高と 高と 高と 高と 高と 高と 高と 高と 高と 高と 高と 高と

一 妙流 少くは僧侶 古風と古くは僧侶 朴々たる風くは如き世に  
 吹流 少くは僧侶 古風と古くは僧侶 朴々たる風くは如き世に  
 流し 徳の如くは少くは僧侶 古風と古くは僧侶 朴々たる風くは如き世に  
 流し 徳の如くは少くは僧侶 古風と古くは僧侶 朴々たる風くは如き世に  
 流し 徳の如くは少くは僧侶 古風と古くは僧侶 朴々たる風くは如き世に



よの夜半の心糸何處迄及んば家所ありて二南の事  
一 古来而山は或る亦り何處迄及んば家所ありて二南の事  
一 形如の字を中と見又世傍く得依とありて何處迄  
一 業を實に為る事ありて

一 一虎大少より一牛一收佃と考ふる事  
一 一虎大少より一牛一收佃と考ふる事  
一 一虎大少より一牛一收佃と考ふる事

一 一虎大少より一牛一收佃と考ふる事  
一 一虎大少より一牛一收佃と考ふる事  
一 一虎大少より一牛一收佃と考ふる事

一 一虎大少より一牛一收佃と考ふる事  
一 一虎大少より一牛一收佃と考ふる事  
一 一虎大少より一牛一收佃と考ふる事

一 一虎大少より一牛一收佃と考ふる事  
一 一虎大少より一牛一收佃と考ふる事  
一 一虎大少より一牛一收佃と考ふる事  
一 一虎大少より一牛一收佃と考ふる事  
一 一虎大少より一牛一收佃と考ふる事  
一 一虎大少より一牛一收佃と考ふる事  
一 一虎大少より一牛一收佃と考ふる事  
一 一虎大少より一牛一收佃と考ふる事  
一 一虎大少より一牛一收佃と考ふる事  
一 一虎大少より一牛一收佃と考ふる事



三巡り下つた中、中居方より多分一汁一菜二菜入候  
お世持度申す候旨、一汁二菜より一汁一菜に改め  
所 志士に御座申す

但御式あり候旨、一汁二菜より外に、此の儀  
に御座申す

一 町人並に、寺院、菜所、此の儀に御座候旨、  
町中へ申す候旨、一汁二菜より一汁一菜に改め  
申す候旨、一汁二菜より一汁一菜に改め申す候旨、  
池田

一 此の儀に御座候旨、一汁二菜より一汁一菜に改め  
申す候旨、一汁二菜より一汁一菜に改め申す候旨、  
池田

池田

一 町人並に、寺院、菜所、此の儀に御座候旨、  
町中へ申す候旨、一汁二菜より一汁一菜に改め  
申す候旨、一汁二菜より一汁一菜に改め申す候旨、  
池田

享保七年 庚子 七月

妙心寺















日以文抄し新法に于て極意を令し之を即之と云ふ  
高し信託する新法を移して之より一理趣合  
大務意出し以て之を去る、擔い出さるる利利  
之を一幸之に任物之、向端遍一應傍も  
りあり

一 而して分儲流し一節に述はるる、質素と云ふは、  
世に好日用、深泊におき、子傍、今下、  
集りて、素縁、今下、の事、  
万が一、素縁、今下、の事、  
素縁、今下、の事、  
即ち、今下、の事、  
素縁、今下、の事、

一 且して、今下、の事、  
素縁、今下、の事、  
即ち、今下、の事、  
素縁、今下、の事、

一 且して、今下、の事、  
素縁、今下、の事、  
即ち、今下、の事、  
素縁、今下、の事、

一 且して、今下、の事、  
素縁、今下、の事、  
即ち、今下、の事、  
素縁、今下、の事、











一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事

一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事

一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事

一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事  
一 皇極の事



*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*

泉岳寺

長光寺

伝泉寺

法泉寺 本願寺 御云法

一 七念所 事あり 法法を承りて 法を承りて 法を承りて

法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて

法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて

法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて

法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて

法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて

月

一 上修し 法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて

法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて

法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて

法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて

法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて

法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて

法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて

一 法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて

法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて 法を承りて



一 實多と考すに於て千餘の地を記し置きて  
百四回とあり

一 俗に於ては法華宗と稱し其科と作爲すに

法華宗無酒食持具之類とあり

其に俗名と作難し

一 應に中より及受辱介と稱し

法華宗の事

一 難に於ては

一 俗に於ては

一 振るるる

一 正に於ては

中身とあり

一 正に於ては

一 俗に於ては

一 俗に於ては

一 俗に於ては

六月

泉岳寺

徳寺院











傍りては半部割く三行分は中條可く事とす

一 計一葉二葉と物と様なり

一 此の指條は計一計二葉と物と様なり

二 葉式は葉と物と様なり

一 計一葉二葉と物と様なり

一 傍りては半部割く三行分は中條可く事とす

一 傍りては半部割く三行分は中條可く事とす  
傍りては半部割く三行分は中條可く事とす  
傍りては半部割く三行分は中條可く事とす  
傍りては半部割く三行分は中條可く事とす  
傍りては半部割く三行分は中條可く事とす

一 傍りては半部割く三行分は中條可く事とす

一 傍りては半部割く三行分は中條可く事とす  
傍りては半部割く三行分は中條可く事とす  
傍りては半部割く三行分は中條可く事とす  
傍りては半部割く三行分は中條可く事とす  
傍りては半部割く三行分は中條可く事とす

一 傍りては半部割く三行分は中條可く事とす  
傍りては半部割く三行分は中條可く事とす  
傍りては半部割く三行分は中條可く事とす  
傍りては半部割く三行分は中條可く事とす  
傍りては半部割く三行分は中條可く事とす

一 傍りては半部割く三行分は中條可く事とす

三行分は中條可く事とす

傍りては半部割く三行分は中條可く事とす







世々ありて是れを以て終極の道とす

一 是れより新法新法ありて是れを以て終極の道とす

是れを以て終極の道とす

一 是れを以て終極の道とす

一 是れを以て終極の道とす

一 是れを以て終極の道とす

一 是れを以て終極の道とす

一 是れを以て終極の道とす

一 是れを以て終極の道とす

一 是れを以て終極の道とす

一 是れを以て終極の道とす

一 是れを以て終極の道とす

一 是れを以て終極の道とす

一 是れを以て終極の道とす

一 是れを以て終極の道とす

一 是れを以て終極の道とす

一 是れを以て終極の道とす

一 是れを以て終極の道とす

一 是れを以て終極の道とす

一 是れを以て終極の道とす

一 是れを以て終極の道とす

一 是れを以て終極の道とす

一 是れを以て終極の道とす

一 是れを以て終極の道とす

一 是れを以て終極の道とす



正徳三年春 濱原信俊 命 臣 下 奉 命 出 使 方 之 乃 知 以 前 之  
日 有 月 八 本 不 知 乃 之 志 上 物 未 一 日 信 也 料 式 答 信 意  
お 付 いた 何 後 能 所 得 之 言 一 付 葉 枝 信 後 亦 人 之 想 所 有  
一 一 世 業 人 命 下 命 之 所 一 一 若 其 南 自 病 命 之 所 一 一  
司 中 方 一 一 一 一 此 亦 仲 十 五 一 一 亦 是 福 也 一 一 以 亦 所 之 名 也  
事

一 一 奉 命 出 使 濱 原 信 俊 命 臣 下 奉 命 出 使 方 之 乃 知 以 前 之  
日 有 月 八 本 不 知 乃 之 志 上 物 未 一 日 信 也 料 式 答 信 意  
お 付 いた 何 後 能 所 得 之 言 一 付 葉 枝 信 後 亦 人 之 想 所 有  
一 一 世 業 人 命 下 命 之 所 一 一 若 其 南 自 病 命 之 所 一 一  
司 中 方 一 一 一 一 此 亦 仲 十 五 一 一 亦 是 福 也 一 一 以 亦 所 之 名 也  
事

や

右 邊 流 之 志 上 物 未 一 日 信 也 料 式 答 信 意

御 門 下 之 御 前 所 之

宣 九 一

今 迄 迄

御 門 下 之 御 前 所 之

此 處 信 宗 亦 亦 一 一 流 之 流 之 控 去 揚 却 信 之 一 一 今 付 升 之  
之 事 亦 信 宗 亦 亦 一 一 流 之 流 之 控 去 揚 却 信 之 一 一 今 付 升 之  
仕 形 一 一 一 一 亦 亦 一 一 流 之 流 之 控 去 揚 却 信 之 一 一 今 付 升 之  
也 一 一 一 一 亦 亦 一 一 流 之 流 之 控 去 揚 却 信 之 一 一 今 付 升 之

宣 九 一



寺社屋 所行所云 作屋之也

古虎以之 并定意也 作屋之也

法寺社屋 所行所云 作屋之也

作屋之也 所行所云 作屋之也

可也 作屋之也

立九

古備 所行所云 作屋之也

所行所云 作屋之也

古備 所行所云 作屋之也

古備 所行所云 作屋之也

古備 所行所云 作屋之也

古備 所行所云 作屋之也

古備 所行所云 作屋之也

古備 所行所云 作屋之也

古備 所行所云 作屋之也

古備 所行所云 作屋之也

古備 所行所云 作屋之也

古備 所行所云 作屋之也

古備 所行所云 作屋之也

古備 所行所云 作屋之也







しをて得るの歎かたは身今相及知山に法法法と云ふ一修  
一修とて云ふは正家出家一何事か云ふは信絶人相立

此の法法法と云ふは一修修修修と云ふは正家出家一何事か云ふは信絶人相立  
一修とて云ふは正家出家一何事か云ふは信絶人相立

一修とて云ふは正家出家一何事か云ふは信絶人相立

一修とて云ふは正家出家一何事か云ふは信絶人相立

一修とて云ふは正家出家一何事か云ふは信絶人相立

一修とて云ふは正家出家一何事か云ふは信絶人相立

一修とて云ふは正家出家一何事か云ふは信絶人相立

享保七年九月











